

終戦前後



終戦前後

井上 すみ子

新井四丁目

昭和二〇年三月、米軍の空襲は日をおって激しくなるばかりでした。空襲警報が鳴ると、みな防空壕に走るのです。爆音が遠くなるのを待って、防空壕から出て見ると、あちこちに遠く近く炎と黒炎があがっているのです。今日はどちらの方面だと心配しながら、夜になるともんぺ姿のまま床に入り、枕もとに防空頭巾をおき、玄関にバケツを用意して寝る毎日です。一日一・三合の大豆のしぼりかすの入ったお米の配給に大根の葉などを入れ、量を少しでも増して炊くのです。お魚やお肉は忘れた頃に、ほんの少量の配給です。煙草を売る日は、たった一箱の煙草を買うために朝五時前から列が出来ます。すこしばかりのつてをたよって着物や時計などを持って農家に行き、お米やさつま芋などとかえてもらうのです。

日ごとに空襲が激しくなっています。忘れることは出来ません。五月二五日の大空襲はB29の波状攻撃。まず燈火管制の黒い町に照明燈が投下され、一瞬にして町は真昼のような明るさです。火の手のない方に逃げるようにと、警防団の方の裂

けるような声が聞こえます。焼夷弾が一メートル位の布をつけて花火のように落ちてまいます。あちこちに火の手が上がります。バケツで消すどころではありません。火の手のない所に逃げるのに一生懸命です。

飛行機が去って空も静かになりました。夜が白々と明けてまいました。一面の焼け野原です。あちこちがくすぶっています。皆ぼうぜんと立ちつくしています。自分の家は跡かたもありません。やがて気を取りなおしたように、三三五五親類知人をたずねて去ってゆかなければなりません。

夫の工場もいつの間にか軍需工場に変わっていました。そのの工具さんの寮の一部屋を借りて住むことになりました。食物は日一日と少なくなっています。軍需工場がわかっているのか、今度は爆弾です。家がゆれます。水道管がやられて道路は水が流れて川のようにです。次は機銃掃射です。押し入れの上段にふとんを全部つんで、下段に入って飛行機が去るのを待つのです。爆弾、機銃掃射と日々激しくなるばかりです。誰とも

なく一億一丸となって決戦などと皆思っています。やがて広島に続いて長崎にも原爆が落とされ、たくさんの人がなくなりました。立ちあがることの出来ない敗戦です。

昭和二〇年の八月十五日、その日は風のないむし暑い日でした。十一軒の隣組に午前十一時頃に組長宅に集まるようにとの回覧がまいりました。「重大放送があるらしいのよ」と誰かが話しています。皆心身ともにくたびれ果てています。集まった十人、誰もかも不安な色はかくせません。私も自分なりに考えました。重大放送の内容は「一億一丸となって本土上陸の敵に体あたりせよ」か、それとも「女子供は出来るだけ田舎の方に避難せよ」か、そんなことを考えていました。集まった皆もそれぞれのことを思い考えていたことでしょう。やがてラジオから流れ出て来る玉音。初めて耳にする陛下の玉音「しのびがたきをしのび」に心なしか涙をおぼえました。無条件降伏におそらく陛下は御自分の命をおかけ遊ばしたことと思います。戦いの終止符、敗戦、それは思ってもみなかったことでした。あちこちからおえつが聞こえます。私もだまって涙をふきました。皆言葉少なにただぼうぜんとしていました。他国との戦いに敗戦を知らない国民は、これから先どうして生きて行くのでしょうか。五月二五日の空襲に、私たちの持てるすべてを焼かれ、今の間借りの家には鍋とふとんだけです。がらんとした部屋に帰り、くずれ折れるように座りました。まとまらない考えの中に、

今日からはもう子供をおぶって防空壕に走ることもない、と悲しい中に心のどこかでほっとした思いがありました。そこに夫が無言で帰ってまいりました。

夫の工場はいつの間にか軍需工場に変わっていました。夜も昼もなかったのです。軍からの材料も来なくなり、「これがぎりぎりだったのだろう」と夫はそういつて手巻きの小さなたばこに火をつけました。これから先はどうなるのでしょうか。夫は何も答えませんでした。

姑に連れられて、五年生の二男と六歳の三男が、私のモンペをしつかりにぎって涙を一杯ためていた姿がふと思い出されました。父親にしかられて三人で乗って行った汽車。無事に田舎まで着きますようただ祈りました。疎開先が両方に別れていれどどちらかが生き残れるという夫、親のない子はみじめです。死ぬならいっしょに、といつてひどくしかられたことが次々に思い出されました。ああ、どちらも無事でよかった。一家七人戦争前のように暮らしていける。その時には家が焼かれてなくなっていることも忘れてうれしかったのです。いつの間にか四時を回っていました。自分で思ったよりもしつかりしているのに驚きながら、整える膳もない夕食のしたくに立ち上がりました。私の八月十五日の思い出はこのようなものです。

毎年毎年と八月十五日がもう四八回も回ってまいりました。その時の子供達ももう六〇歳をすぎました。再度起こしてはな

らないおそろしい、そしてみじめな戦争。八月十五日が来る度に忘れないように戦争の話を孫達に伝えております。二度と戦争を起こさないように。

